

山梨県内で働く介護関連職種の職業性ストレスの実態と社会的スキルとの関係

主任研究者 山梨産業保健推進センター特別相談員 森川 三郎
研究代表者 山梨産業保健推進センター相談員 小田切 陽一
共同研究者 山梨大学医学部看護学科教授 飯島 純夫
山梨県立大学人間福祉学部准教授 坂本 玲子
山梨産業保健推進センター相談員 金子 誉
山梨産業保健推進センター所長 佐藤 章夫

1. 調査目的：山梨県内で働く介護関連職種の職業性ストレスの実態及び社会的スキルとの関係を明らかにし、職業性ストレスを軽減させるための情報を分析する。

2. 調査方法：1) 調査対象：①山梨県内の69の老人福祉施設と29の老人保健施設の従業者（職種不問・各施設10人）980名 ②グループホームの従業者（職種不問）100名 ③訪問介護事業所のヘルパー118名、の総数1198名。

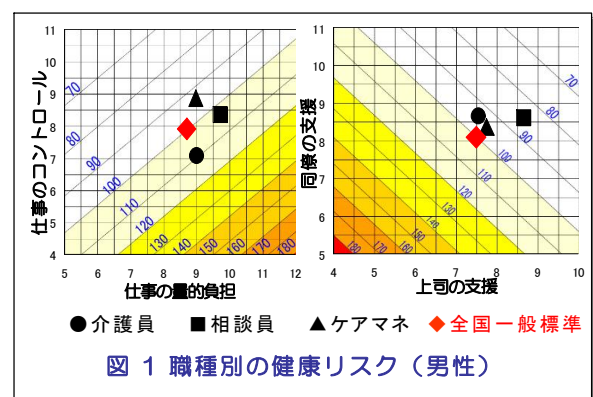
2) 調査内容：①職業性ストレス簡易調査票（57項目・4件法） ②社会的スキル調査票（18項目・5件法） ③コーピング調査票（39項目・4件法） ④属性：性・年齢・資格・職種・勤務年数、施設種類、等を内容とする無記名自記式の質問紙調査を2006年8月～11月に実施した。

3) 回収状況：郵送法により回収（回収率59.9%）。有効回答者は555名（男性135名・女性420名、有効回答率46.3%）。

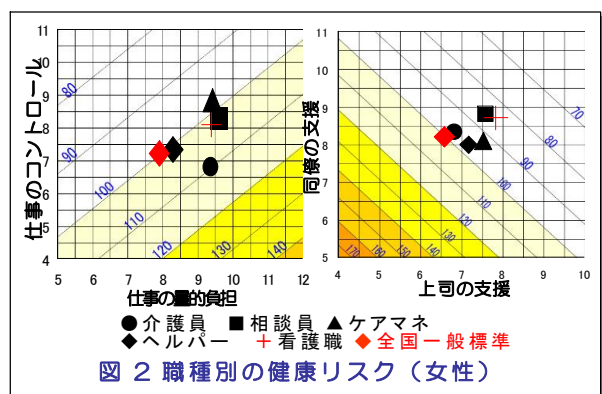
4) 分析方法：職業性ストレス簡易調査票は、標準化得点を用いた方法により解析し、ストレス判定図及びストレスサーとストレス反応の有無で表されるストレス区分を利用した。社会的スキル調査票は、合計得点及び下位尺度項目である「初歩的」・「高度な」・「感情処理の」・「攻撃に代わる」・「ストレスを処理する」・「計画の」の6つのスキル別得点を使用した。社会的スキルと職業性ストレスの関連を明らかにするために、ストレス反応のあり群とストレス反応のなし群について、合計及び下位尺度別スキル得点を求めて、2群間での比較を行った。コーピング調査票は、「積極的認知・行動」・「回避的認知・行動」・

「症状対処」の3つのコーピング下位尺度得点を求めて、社会的スキル得点の高値群・中値群・低値群と比較した。統計学的検定はt検定（有意水準5%、1%）を使用した。

3. 結果・考察：1) 職業性ストレス：介護員（ヘルパーを除く）・ホームヘルパー・相談員・看護職・介護支援専門員に分類した職種別のストレス判定図を図1（男性）及び図2（女性）に示した。男性では、仕事の量的負担とコントロール度から判定される健康リスクは、介護員で最も高く（109）、次いで相談員（104）、介護支援専門員（93）であり、介護員は量的負担が相談員よりも低いにもかかわらず、コントロール度が低いために健康リスクが高く評価されていた。一方で介護支援専門員は、介護員と同程度の量的負担であるにもかかわらず、コントロール度が高く健康リスクは低く抑えられていた。上司と同僚からの支援は相談員が他の職種よりも良好で、最も低い健康リスクを示した（84）。以上より、総合健康リスクは介護員が他の2職種よりも高いことが示された。女性の場合（図2）も仕事の量的負担とコントロール度から判定



される健康リスクは、介護員(109)で最も高く、次いで相談員(102)、看護職(102)、ホームヘルパー(101)、介護支援専門員(98)の順であった。介護員では仕事の量的負担が高いわりにコントロール度が低いという特徴が認められた。上司と同僚の支援から判定した健康リスクは、いずれの職種も100以下と良好で、特に看護職と相談員では上司と同僚の支援が高く、健康リスクは高くなかった。

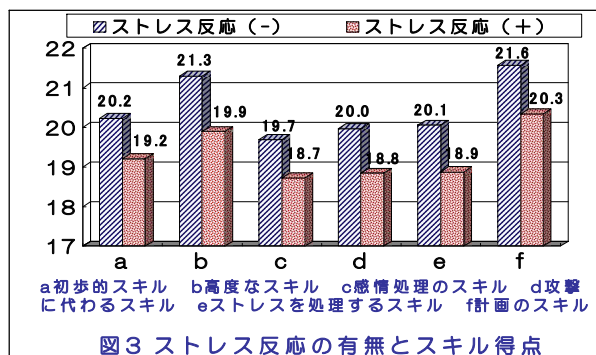


2) ストレッサーとストレス反応: ストレッサーとストレス反応の有無から分類されたストレス区分の割合を表1に示した(表中の一般企業は2005年の山梨県内の調査による)。ストレッサーが存在する割合(区分2+区分4)は介護関連職が65.5%で、一般企業の31.1%に比べると高かったが、ストレス反応が存在する割合(区分3+区分4)では介護関連職が32.4%で、一般企業の30.4%とほぼ同程度であった。介護関連職種にはストレッサーは存在するがストレス反応がないという区分2が多かった(41.2%)。

			1	2	3	4
介護職	男性 N=135		26.7	34.1	11.1	28.1
	女性 N=420		26.2	43.6	7.1	23.1
	合計 N=555		26.4	41.2	8.1	24.3
一般企業 N=1729			54.1	15.5	14.8	15.6
1. ストレッサー -	ストレス反応 -					
2. ストレッサー +	ストレス反応 -					
3. ストレッサー -	ストレス反応 +					
4. ストレッサー +	ストレス反応 +					

3) 職業性ストレスと社会的スキルの関係: ストレス反応なし群(区分1と区分2)とあり群(区分3と区分4)に分類して社会的スキルとの関係をみた。社会的スキルの総得点では、男性ではストレス反応なし群で61.8 ± 7.5、ストレス反応あり群で57.6 ± 10.2であり、ストレス反応なし群はストレス反応あり群と比較して有意(p<0.01)

に高かった。女性においてもストレス反応なし群の総スキル得点61.1 ± 8.5は、ストレス反応あり群の58.2 ± 9.2よりも有意(p<0.01)に高かった。社会的スキル得点を6つの下位尺度別に分けて、ストレスあり群となし群と比較した(図3)が、いずれもストレス反応なし群がストレス反応あり群と比較して有意(p<0.01)に高かった。



4) コーピングと社会的スキルとの関係: 積極的認知・行動コーピングの得点は、女性において社会的スキルの高値群と比べて中値群、低値群の順に有意(p<0.01)に低かった。また回避的認知・行動コーピングの得点は、男性において社会的スキルの高値群で最も低く、中値群、低値群の順に高い傾向を認めた。症状対処コーピングの得点は、女性において社会的スキルの高値群と比べて中値群と低値群の順に低く、低値群では高値群と比較して有意(p<0.01)に低い得点を示した。

4. 結論: 1) 介護関連職種は「仕事の量的負担」が高いわりに「仕事のコントロール度」が低く、職業上ストレスのリスクが高かった。2) ストレスのリスクが高いにもかかわらず「上司の支援」と「同僚の支援」が高く、総合的な健康リスクは高くなかった。3) 一般企業と比べてストレッサーが存在する割合は高いが、ストレス反応の割合は同程度であった。4) ストレス反応なし群は反応あり群と比べ、社会的スキルの総得点及び下位尺度得点が高かった。5) コーピングスタイルと社会的スキルレベルとの間の関連が認められた。以上より、①仕事の裁量権を高めること、②上司や同僚の支援を更に高めること、③社会的スキルの獲得を促進すること、などが介護関連職種の職業上ストレスの軽減に役立つことが示唆された。